

研究ノート

洪世和著 米津篤八訳 『コレアン・ドライバーは、パリで眠らない』

猪股正廣

1. 出会い

本稿の標題には邦訳の標題を掲げたが、原本は『私はパリのタクシー運転手』と題されている。私は今年の春、たまたま立川市の中央図書館で、この原本を見かけた。近年完成したばかりのその図書館には外国語の本も用意されており、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語の他、ハングルで書かれた単行本のコーナーもあった。ハングルの習いたての私は、原本の標題に惹かれてこの本を手に取り、頁をめくってみた。

パリにきてください。

ああ、夢とロマンの都市、パリにきてください。

私がそちらに行けないから、あなたがきてください。

私を訪ねなくてもいい。いいえ、訪ねないでください。

こう、記されている。ふーん、これなら、私にも読めそうだ。さらに頁をめくると、写真が何枚も載っている。パリの光景がほとんどだが、タクシーの車体の一部を大きく撮った写真もある。どうやら、パリに住む韓国人タクシー運転手によるパリ案内記らしい。けれどもなぜ、自分はそちらに行けないから、

読者にきてください、あるいは、自分を訪ねないでください、なのか。

表紙の折り返しを見直す。そこに著者の写真と略歴があったはずだ。静かで穏やかな顔である。

洪世和

1947年 ソウル出生。京畿中・高卒業。

1966年 ソウル大工学部金属工学科入学、67年10月退学。

1969年 ソウル大文理学部外交学科入学。文理学部演劇サークル活動。
72年、「民主守護宣言文」事件で除籍。

1977年 卒業。77-79年、「民主闘委」、「南民戦」組織に加担。

1979年 3月貿易会社海外支社勤務のため、ヨーロッパに行く。
「南民戦」事件によって、帰国できず、パリに定住。

1982年 以降今日まで観光案内、タクシー運転等、いくつかの職業に従事しながら亡命生活中。

もちろん、ハングルで書かれたこの略歴の内容がすぐ正確に理解できたわけではない。家に帰って机に向かい、辞書を片手に調べてもわからない言葉があった。とくに、略歴中のかぎかつこ内の漢字を確定するのが難しかった。しかし、それ以外の演劇、事件、除籍、加担、観光案内、運転、亡命などの漢字熟語から、著者のおおよその経歴は把握できた。そこがハングルの有り難いところである。外国語のテキスト読解法では、イラストや写真・数字・固有名詞・国際共通語などを手がかりに、内容についての仮説を立てることを勧めるが、中国語や韓国語やベトナム語や日本語では、ヨーロッパ語源の外来語の他に特定の漢字熟語もその国際共通語に当たるわけである。勝手知ったる読解法の実践によって、私がこの著者について立てた仮説は、私と同世代の元ソウル大学生が、政治活動の結果、フランスに亡命し、タクシー運転手をしているらしい、というものであった。

この本をこつこつ読んでみようかな、と考えた。市営図書館の館外貸出期間

は2週間であるが、その間に全部は読みきれなくても、プロローグだけでも、あるいは本文中の数章を拾い読みしてもいいではないか、と。

こうして私は、はまり込んでしまった。数週間後には、借りている本では気が済まなくなって、ソウルの書店に注文して同じ本を取り寄せた。そして辞書を片手に読み続けた。遅々として捗らないハンゲルの読解に飽きると、タクシー運転手に関する日本語の本を探して、梁石日の著作なども読み、その後再び辞書を取った。初夏の頃ほぼ全体の四分の三ほど読み進んでからようやく、標題の訳本が出版されているのを知り、ただちに注文したが、それが届くの待ちきれず、大学の図書館から借り出し、残りの四分の一はその訳文を参照しながら平行して原文を精読することにした。そうして読んでいくと、残りの部分には回想の章など難解な箇所が多く、訳本がなければ、かなり難渋したであろうと思われた。読み終えていた部分についても、原文では明瞭な像を結ばなかった箇所の訳を読んで、腑に落ちたところがいくつもある。訳注や解説も有り難かった。お世話になった。本稿の標題に訳本のそれを掲げたゆえんであるが、以下の紹介でもその訳文を利用させていただく。

2. 本と著者

この本の魅力の一つは、変化に満ちた巧みな章構成にある。プロローグは日本語の「ですます」調に当たる丁寧体（上称）で書かれ、軽快な文体でパリの観光案内をしているように見えながら、実は本論部分の重く垂れ込めた天空に、それでも時に明るく薄日のさすような内容を先取りしてもいる。プロローグは本論とは逆にひたすら明るい空のもと、陰影がひときわ色濃いイメージとも言えようか。あえて陰の部分を探せば、さりげなく散りばめられた言説、…例えばエッフェル塔近くの海洋博物館にかつて日本と戦った朝鮮の亀甲船の模型がよりによって日本の和船の陳列台の端に置かれていたが、今はどうなっているかと気にする素振り、あるいは、普仏戦争や第一次大戦後フランスとドイ

ツ間の終戦処理に見られた歴史の恨みをめぐるエピソード、あるいは、犬や猫の餌を輸出する国タイの食料事情についての考察などがそれに当たろう。とはいえ、それらも暖かい語り口のオブラートに包まれ、強烈な辛味や苦味や酸味は直接感じられない。パリの路上に転がる犬の糞を踏んだら、フランス人のように「メルド！」と叫べという著者の低い笑い声が、読者の耳の奥から喉元にまで届くかのようである。

本論は第1部「パリの異邦人」と第2部「行くことのできない国、コレア」の2部構成であり、それぞれに9章づつが配されているが、その章と章とのつなげ方が実に心憎い。第1部は、ことにそれが際立っており、私のように原文の読みの遅い読者でも思わず知らずに次の章に滑り込んでしまう。蝸牛が、植物の葉や茎や花をそれと区別せずに動いて行くように。

第1章にはパリでタクシーの運転手になるための試験の様子が描かれており、第2章ではパリ第七大学歴史学部に登録していた短い期間に経験した新しい社会との出会いが語られる。第3章では臨時タクシー運転資格を得た著者が賃貸タクシーを借り受け、初めての乗客を乗せてオルリー空港にたどりつき、南ターミナルのタクシー乗り場で客の順番を待ちながら、煙草をふかして、初めてパリに降り立ったときのことを思い起こす。第4章はそこに至るまでの回想場面。ソウル出国の事情、ドイツのデュッセルドルフ勤務を経て、パリ駐在員として経験した勤務会社の倒産処理などが、煙草の煙のように浮かんでは消える。約1時間後、2番目の客を乗せることで第5章が始まり、第6章はタクシーの運転もようやく板に付き始めた、その3カ月後…と、まるで舞台回しのよう。そう、著者には大学時代、現代劇の脚本を書いたり、演出をした経験もあったのだ。

ここでは各章のつなげ方を強調するために内容を簡単に書いたが、2・30頁にわたる長い章では無論のこと、数頁しかない短い章の描写の中でも、現実のパリの生活と回想のソウルの生活とが頻繁に交代する。全体の印象として著者

洪世和は、あたかも過去を生きる人である。なぜなら1979年に渡欧し、1995年にこの著作を出版するまでのほぼ15年間、故国に帰りたくても帰れない亡命生活中のパセティックな想念がここに凝縮されているからだろう。そこには詩人の叙情も演劇科の迫真も元政治運動家のリアルな眼もある。末尾には、補論として「フランス社会のトレランス」と題した秀逸な分析があり、その文体もプロローグに対応して再び丁寧体に戻るといふ工夫がみられる。読者はおそらく各章に類出する著者の回想によって自国の現代史を振り返り、末尾に至って、フランスにあつて自国にはないとされた社会的伝統としてのトレランスについて、思いをめぐらせるはずである。その進むべき指針が示されるに至った韓国現代史の一局面を、著者の回想場面の言葉を中心として、次に再構成してみよう。

洪世和の父親は、1920年に忠清道の温湯市近郊の農村に生まれた。早くに父母をなくし、少年時代に無一物でソウルに行き、苦難の末、青年になるかならないかの歳で、日本に渡った。東京で沖仲仕などをしながら、次第にアナキストの傾向を帯びるようになる。日本の敗戦後に帰国し、アナキスト青年活動に加わり、右翼青年のテロの標的にもされたが、その渦中に結婚し、長男の世和と次男が生まれる。朝鮮戦争が勃発し、ソウルで食うに困った父親は、家族3人を故郷の村の叔父にあずけた。人民軍治下の村で、人民裁判があり、何人が処刑された。村から人民軍が退却すると、即時に報復が始まる。

まず7人が棍棒で殺された。その他にも、いわゆる反共青年たちに殴り殺された人々の中には、わが一族の本家のあととりだった、私の父のいとも含まれていた。彼は村の人民委員長だった。血を見た村人たちは、いっそう血に飢えた。そしてそれは復讐の血だったために、もう一つの復讐の種を完全に消さなければならなかった。父のいとこの家族はもちろん、先に始末した7人の家族も、1人1人消し去った。幼児も例外ではなく、男女を問わず、老人までもが殺された。そうやって、その小さな村で80人近

多くの村人が死んでいった。

幼い次男が病死し、家族も散り散りになって、父親は逃亡生活を続ける。子育ての自信を失った若い母親が、残った長男を自分の父母に預けたので、洪世和はソウルの外祖父母の家で育つことになる。…ここまでは著者が親族に聞いて記した家族史ということになろうか。

1960年4月の学生運動によって李承晩政権が倒れたのは、洪世和が中学に入学した年であり、軍事クーデターによって朴正熙が政権を握ったのはその翌年であった。64年と65年に第二次大戦の戦後処理をめぐる、いわゆる対日屈辱外交反対のデモがあったときには、高校生として参加し、捕らえられ、鐘路警察署に連行されて数時間後、放免されたという。66年にソウル大学工学部に入学後、69年に文理学部外交学科に再入学したのは、「外交官になって朝鮮半島の統一政策の一翼を担いたい」という夢を抱いていたからだった。

69年には朴正熙大統領三選改憲反対闘争があり、翌70年には学園での軍事教練反対闘争があったが、洪世和はいずれのときも「学生大衆の一員として」熱心に駆け回った。70年11月には、平和市場労働者の全泰壹の焼身自殺があり、涙を流したと書いている。その間、政権批判の視点を持たない外交学科の授業内容に失望し、教室から遠ざかるようになり、71年の春には文理学部の演劇部員となった。現代創作劇の練習を通して、文学者金芝河、独特なパンソリ演者林賑澤、「朝露」の作詞作曲家金敏基などとの交友が生じる。学生運動が盛んになったため、71年の10月13日にはソウル大学が臨時休校となり、15日には朴正熙が衛戍令を発動し、「一切のサークル活動と、一切の集会が禁止」された。72年6月10日に著者は「民主守護宣言文」を作成し、2名の学生と共に校内にまいたが、1カ月後に捕まり、中央情報部や市警察局対共分室で厳しい取調を受けた。釈放の日、父親が迎えに来る。

——体は大丈夫か？

——はい、大丈夫です。

それだけだった。いっしょに食事をして、二、三時間いっしょにいる間に交わした対話は、この一言ずつがすべてだった

こうして大学を除籍になったが、4カ月後には「10月維新」が起き、それ以前の除籍学生は全員救済され、復籍できることになった。翌73年10月には反維新学生闘争が起きたが、洪世和はそれに参加できなかった。当時、自身の結婚式と徴兵による入隊が迫っていたのである。しかし、軍隊生活中もかつての学生運動歴を理由として保安隊に1カ月監禁され、厳しい取調を受ける。

1976年8月下旬にようやく除隊となり、家に戻る。その間に子供が1人生まれており、もう1人は新妻の腹の中で育ちつつあった。こうして4人家族の家長にならなければならなかったが、大学卒業までにはもう1学期を残しており、予備校講師のアルバイトをしながら、卒業論文を書く。若干の曲折を経て77年、「ソウル大学工学部に入学してから数えて11年6カ月ぶりに」卒業証書を受け取る。この頃に「韓国民主闘争国民委員会」（民主闘委）、「南朝鮮民族解放戦線準備委員会」（南民戦）に入り、「熱心に組織活動に参加した」。その後78年に貿易会社に入社してからも、朴独裁政権打倒のビラ配布などの活動を続けた。この「南民戦」組織の一員であったことが後に亡命生活を余儀なくされる原因となるのであるが、それが発覚したのは既にパリ支社員として働いていた79年の10月のことであった。

「南民戦事件」と呼ばれるこの事件について、故・梶山秀樹が金南住詩集『農夫の夜』に寄せた解説の冒頭を引用しておこう。

韓国内務部が「南朝鮮民族解放戦線事件」を大きく公表したのは1979年10月9日、あの衝撃的な朴正熙大統領射殺事件のわずか2週間余り前のことだった。その時点ですでに詩人金南住氏や中心人物とされた李在汶氏（共に10月4日逮捕）など20人が検挙されており、発表文では関連者計74人とされていたが、その後3人の軍人を含めて若干追加的に逮捕された人があり、被検挙者の総数は80人以上に上るとみられる。被弾圧者の中には

任軒永のようにもの書きとしてやや名の知られていた人やアカデミアンも若干含まれており、総じて大学卒の知識人が多かったが、従来の民主化闘争で声明などに必ず名を連ねるような著名人ではなく、無名の生活者たちだった。「事件」直後に知りえた73人に限ってその年齢構成を見ると、22歳から69歳（当時）にまでわたり、20代32人、30代24人、40代13人、50代2人、60代2人で、うち15人が女性であった。また職業別には、大学教員・研究所員8人、教師11人、会社員・勤め人16人、その他（自営業・工員・派出婦・タクシー運転手など）14人、不明・無職（除籍学生含む）18人、学生6人という多様な構成であったという。

彼らは、「ソウルの春」の活気に満ちた期間を無念の獄中で過ごし、「光州事件」後の初期全斗煥政権のもとで、死刑2名、無期懲役5名をはじめ全員有罪の判決を確定された。そして、死刑判決を受けた李在汶氏は81年11月22日、不十分な治療のもと獄中で病死し、もう一人の死刑囚申香植氏は82年10月8日処刑されてしまった。梨花女専卒で居酒屋をやりながら若い人たちの面倒をよく見てきたという全寿鎮さんは、夫・息子とともに逮捕され、重体になるまで放置されたすえ、保釈されてまもなく、82年4月14日に亡くなってしまった。享年65歳。（詩人金南住は懲役15年を宣告され、釈放後まもなく94年に病死）

このような過酷な弾圧を国外にいたためにかろうじて免れた洪世和は、しかし勤務先の貿易会社が倒産した後も帰国できず、まもなく生活にも窮して、タクシー運転手として生きる決心を固める。その経験が本書のもうひとつのテーマになっているのだが、著者の回想の眼差しは、学生時代に同じ下宿にいた同業の友人チョンマニへの思い出を仲立ちにして、故国ソウルのタクシーにも向けられる。こうした比較の視点に誘われて、読者の中にはわが国のタクシーについても思いを馳せ、あるいは私のように、元タクシー運転手の在日韓国人作家梁石日のタクシードライバーものにも手を伸ばすことになるかもしれない。

生活に追いつめられてタクシーの運転手になり、後にその経験を本に書いて作家になるという共通点が洪世和と梁石日の両者には見られるが、パリではタクシー運転手としての勤務体制などが東京あるいはソウルとは相当に異なるようである。その辺のタクシー事情を次にみておく。

3. タクシー事情

まず最初に、タクシー運転手になる方法であるが、東京ではタクシー業界が慢性的な人手不足であって、至って就職の敷居が低い。二種免許取得の資格は普通免許を取って3年以上経過し、21歳以上であることとの条件があるが、この条件を満たしており、働く意志があれば、タクシー会社が免許取得費用の約10万円を立て替えてくれる。免許取得後1年以上その会社に勤務すれば、費用は返さなくてもよく、免許取得期間の約2週間は会社から手当も支給される。梁石日がそうだったように、食い詰めて再出発するときの有り難い緊急避難先なのである。二種免許試験の内容は、試験日の午前が学科試験、午後が実技試験であるが、学科試験は普通免許の学科試験同様四者択一方式で、二種免許関連の問題が数種追加されている程度であり、あまり難しくはない。むしろ実技が大変らしい。合格率は30パーセント、平均受験回数は4・5回である。「一辺約3mの三角形スペースでの切り替えしなど高度な技術が要求され、こまごまとした確認動作や前輪のタイヤの角度、ハンドルを回す回数までチェックされる」(雑誌『特集アスペクト』による)という。

これに対して、洪世和の本によれば、パリのタクシー運転手になる資格は、1年以上パリ地域に住んでいることと一般小型車以上の運転免許証を1年以上所持していることである。外国人の場合はこの他に、フランスの在留許可証と労働許可証が要求される。第一関門の運転実技試験は、試験官3人を乗せて約15分間パリ市内を走るのだが、「試験官が主に見るのは、スムーズな加速と減速、適当な速度などの、安定した乗り心地に関するものと、交差点で優先車両

に道を譲るといった類のことをきちんと守るか、などの安全運転に関すること」であり、さして難関ではない。意外にも最も難しいのは、後日行われる第二関門の筆記試験であり、とりわけその最初に行われるフランス語の言葉の基礎理解能力を問う「書取り」(dictée)であるらしい。「パリのタクシー運転免許試験では、書取りに失敗して不合格になる率が最も高いが、外国人だけでなくフランス人も同様だという」

「書取り」以外の筆記試験は大きく4つの部分からなっており、1つ目はパリ市内の与えられた出発地から目的地までの近道を問う問題である。例えばパリの北駅から南にあるモンパルナス駅に至る道の名を順番に書く。受験生は「40本の行くべき道」の正答リストを持って暗記してきており、これらのうち2問が出題される。この40本の道を覚えればパリ市内の主要な幹線道路の位置と方向が自然と分かるようになるという教育的な配慮による出題である。2つ目の問題はタクシーの料金率である。パリのタクシーは客を乗せた地域と時刻によって基本料金に加えて $A(3.53F/km) \cdot B(5.83F/km) \cdot C(7.16F/km)$ の3種の料金率が適用されるので、この区分を覚えて正しく適用できなければならない。3つ目は短答式の問題で、運転勤務規定時間に関する問題と博物館や官庁の住所を問う問題、客を乗せることができない衛星都市に関する問題などがあったという。4つ目の問題は、追加料金の問題であり、旅行トランクを乗せるときや乗客を4人乗せるとき、あるいは駅や空港のバスターミナルから客を乗せるときに加算される追加料金額を記入する。

以上のように、パリのタクシー運転手試験は、パリのタクシー事情が複雑なために試験問題も自ずと細部にわたらざるをえないが、問題自体は実際的な性格のものが多いことがわかる。長年パリに住み、運転歴があって、フランス語が堪能で、地理に明るければ、なんとかなりそうである。しかし、大都市パリの地理に通じ、ひとつひとつ道路の名前を覚えることは容易ではない。何らかの強制がなければとても覚えられるものではなからう。事実、上記の試験はタ

タクシー運転の臨時免許証を取得するためのものであるが、臨時免許証取得後6か月以内に本試験に合格する必要がある、その本試験では、600本に及ぶパリの主要道路を完全に把握しているかどうかをみることになっている。7、8人の試験官の前で、籤を引き、口頭で「任意に選んだ4本の道がどこから始まりどこで終わるか、交差点の名前を挙げた後、1番目の道から2番目の道に行く時と、3番目の道から4番目の道に行く時の、それぞれの近道を順に答えるものだった」。

…ため息が出てくる。西洋の都市では、どんな小さな通りにも名前があって、住居表示には便利なのだが、その便利さがタクシーの運転手にとっては客の言う道路の名前が分からないでは済まされない理由になる。都市が大きいほど大変なわけだが、東京ではどうなのかというと、タクシー運転志願者には二種免許取得後、運転者登録をするための5日間の研修が必要とされており、その研修期間中にタクシー近代化センターで地理の試験を受験することになっている。地名、ビル名、ホテル名、結婚式場などの位置の知識が試されるというが、都市住居表示の性格上、道路名というよりは地名や建物名が主になるのであろう。

次に、タクシー運転手の勤務制についてであるが、東京のタクシー会社では車を最大限に運用するために隔日勤務制（二交代制）と時差勤務制が行われている。この二つの制度については先に引用した雑誌特集が簡にして要を得た説明をしてくれているので、ここでもそれを紹介しておこう。「隔日勤務制というのは約18時間の出番（乗務）と明番（休み）を交互に繰り返すシステムである。出番と明番を1セットにして3回繰り返すと翌日は1日の公休が入る。また、月に1回はW公休（2日間の休日）が入る。都合、月に12日出番というシステムになっている。具体的には朝8時に乗務を開始して夜中2時までが出番。その後明番に入り、翌日の朝8時まで休むという具合。…もう一方の時差勤務制というのはいわゆるシフト勤務のことで、朝8時から夜中2時まで乗務

する組と朝9時から夜中3時まで乗務する組という具合に勤務時間をずらすシステムである。時間差をつけることで利用者への便宜を図っているのだ』（『特集アスペクト』）

朝から夜中まで20時間近く勤務して翌日休むという過酷な制度は韓国ソウルでも同じらしいが、パリでは個人タクシーは1日に11時間、タクシー会社に勤める俸給運転手と賃借運転手は1日に10時間までと勤務時間が規定されている。そこで次のような両者の住み分けが生じる。

賃借運転手に比べ、まだしも余裕がある個人タクシー運転手の大半は、正常な生活のリズムを守るために、明け方や朝に仕事を始め、昼下がりや夕方方に終える。そこで自然と昼はタクシーの数が多くなり、空車も多かった。したがって、少しでも収入を増やさなければならない賃借運転手たちは、ほとんど夜間に仕事することになっていた。

洪世和も賃借運転手として、平日は午後5時頃から翌朝の3時まで仕事をした。パリではタクシーの料金率が午前7時から午後7時まではA料金(3.53F/km)であるが、午後7時から午前7時まではB料金(5.83F/km)が適用される上に、夜中には終電に乗り損なった客を拾うことができたからである。この事情はソウルや東京でもほぼ同じであろう。ただし、東京の深夜早朝料金は午後11時から午前5時まで30パーセント増しであり、ソウルは午前0時から午前4時まで20パーセント増しである。東京のタクシー運転手の勤務時間帯は、午前8時出庫、翌朝2時帰庫が一番多く、全体の半数以上を占めている。

きつい仕事である割に、収入が低いという点も3都市に共通しているようである。東京都のタクシー運転手の平均年収は1968年以来、東京都の全産業男子労働者平均年収に及ばず、1992年までは漸増したものの、その後は下降・横ばいが続き、1998年の時点で全産業男子労働者の平均年収は、約688万円であるのに対し、タクシー運転手のそれは約496万円である（『タクシー白書シリーズ・東京のタクシー2000』による）。パリの賃借運転手として土・日も休まず

夜中まで働いた洪世和の場合、「タクシーの賃借料と軽油代を合わせて1週間に支払う経費は約3600フランだが、まずその金を稼ぐために、ふつう4日半から5日かかった。つまり、月曜日から金曜日まで働いて初めて賃借料と軽油代が出て、純益として手元に残る分は、週末の土日に働いて稼がなければならなかった」。当初から、1日の売上平均が750フラン程度、純益は週7日で1500フラン、ひと月に純収入6—7000フランの見込みで仕事を始めたと書いている。1980年代のことであろうから、1フランを25円のレートで換算すると、ひと月の純収入7000フランとして17万5千円、年収210万円となり、当時の東京のタクシー運転手と比べて100万円あまり低い。もちろんこれは「現代版の奴隷」といわれるパリの賃借タクシーの特殊なケースであり、個人タクシー運転手になれば「賃借の時より、ひと月1万フラン以上余分に稼げる」というから、これなら東京のタクシー運転手の年収とほぼ同レベルになる。

洪世和はしかし、個人タクシー運転手にはならなかった。その理由を彼は、「私は文章を読みたかった。私が抱きながらも自分では解けない問題を、掘り下げて考えたかった」としながらも、「このような私の姿は結局、いわゆるインテリの惰性からまだ抜け出せていないことを示していた」と反省しているが、おそらくそのおかげで私たちは、この貴重なエッセーを手にすることができたのである。個人タクシーの資格取得料金と車の購入代金を借金し、その返済のために全力を尽くして働いていたなら、彼が真剣に生きた唯一の証である追想の章も、きれぎれにちぎれて吹き飛んでしまっていたであろう。

洪世和はこの本の中で、パリのタクシーとソウルのタクシーとの相違点について他にも具体的に色々例を挙げており、それは両都市を訪れる観光客にも大いに参考になるはずである。また、滞在者として海外に赴く場合、必ずや異文化とぶつからざるをえないであろうが、その際には著者の経験がひときわ身近に感じられるに違いない。貿易支社員時代にフランス人の同僚と議論して根に持った自分とこだわりを見せなかった相手について著者が考察しているのを読

むと、フランス人や韓国人よりも議論の下手な日本人としては、かなり複雑な気持ちになる。また、亡命の理由を審査官に向かって外国語で説明した際のような、もどかしさ、についても読者は身につまされるのではないだろうか。

「南民戦」、すなわち「南朝鮮民族解放戦線」を英語に置き換えることは難しくはなかった。ところが「南朝鮮」を英語に直しても、「韓国」と同じ「サウスコリア」だった。「南朝鮮」という言葉ひとつが韓国でどのような意味を持つか、韓国人なら理解できる。私自信、分断以来の政治史について「韓国」という言葉が肯定よりも否定の意味を持っていると確信していたが、実際に私が組織の戦士となり、初めて組織の名を知ったとき、「南朝鮮」という単語自体が大きな恐怖となって重くのしかかってきたのは事実だ。その言葉には「民族解放戦線」という言葉より、もっと革命的な意味がこめられているのだが、英語に直せばただの「サウスコリア」なのだった。私の説明は、ついに彼を納得させられないままに終わった。

冷静に考えれば、この国名の問題は高麗、朝鮮、韓国という名称に付随した歴史のコノテーションに関わっていることがわかる。しかし、それをとっさに外国語で説明できる人がどれだけいるだろうか。また、たとえ時間をかけて文書で論じたとしても、ここに書かれているような言語の背景を、歴史文化観を共有しない相手にどこまで理解させられようか。そういう相手は外国人とは限らず、同国人にさえ少なからずいるはずである。それこそ、著者が韓国内で民主化運動に奔走していたときに続いて、パリの同国人社会にあっても積み重ねなければならなかったシジフォスの仕事ではあるまいか。こうした難題を筆者は挿話と寓話とを巧みに使って解決しようとしたように見える。

4. 二つの寓話

この本には確かに印象的な挿話が多い。「シルヴィと小糠雨」、「一輪の赤い

バラ」などの章は、サン・ミシエル広場前のカフェやパール・ラシェーズの共同墓地を背景として交わされる魅力的な女性との会話が映画のロケーション場面のように輝いている。また、短くても心に残る挿話もある。著者が高校時代にバスの中でふと耳にした女性車掌と大学生との対話を回想する箇所もそのひとつだ。大学生が「おい！ つりをくれ！」とパンマル（ぞんざい語）で要求したのに対し、同じ年頃の女性の車掌は「どうぞ」と丁寧体で答え、疲れた様子でドアにもたれて目をつむっていたという。そのイメージが当時耽読していたボードレールの翻訳『悪の華』の中にある一篇の詩「赤毛の乞食娘」と結びつき、さらに職業に対する社会的偏見に開眼する契機ともなる。その後著者は誰に対してもパンマルを使うことが困難になったと述べているが、そこに見られる思春期特有の性急さや潔癖さを恥じる気配はまったくない。著者が少年の感受性を失わずに書いていることがこの本の特徴でもあり、それは次に紹介する二つの寓話についても言えることである。

最初の寓話は、もともと日本の話で、著者はその出所を日本語版によせた序文の中で、「まだ社会主義圏だったチェコで児童教育用に出版された『世界の奇人賢人の話』という本のフランス語版」だと明かしている。

昔、大岡が江戸で判官になったとき、祝いの席に300人の客を招待した。食後の酒席の話で、客の判官たちは裁きには拷問するのが一番だと意見が一致する。大岡は黙ってそれを聞いている。酒が終わりになった頃、大岡は家来の直介に蜜柑を300個持ってくるように命ずる。運び込まれた蜜柑をしばらくして直介に数えさせてみると、一つ不足していることがわかる。直介が盗んだと疑った大岡は、家内の事件を客の前で明らかにできないでは判官の資格が問われるとばかり、大声で直介を追求し、刑吏に拷問道具を用意させる。火焔、煮え湯、焼きごてが今にも使われようとしたとき、真っ青になった直介はひれ伏して、つい一つ食ってしまったと白状し、泣きながら容赦を乞う。沈鬱な表情

で客を見回して、立ち上がった大岡は、直介に歩み寄り、逆に許しを求める。そして、自らの懐から蜜柑を取りだし、客の前に投げて、こう言う。

「それがしの下人は盗んでもいないのに、盗んだと自白いたしました。それももっともらしい話まで仕立てて。…拷問されもせぬうちに、拷問の恐怖がそう言わせたのです！ そして皆様は思い出していただきたい。みなさまの獄で、どれほど多くの人々が今この時にも、無実の罪にうちひしがれているかを！ そしてどうかこの蜜柑を忘れないでいただきたい。真実を明らかにするという美名の下に拷問しようという考えが浮かぶたびに、この蜜柑を思い浮かべていただきたい！」

もう一つの寓話は、小さな出版社を営んでいた優しい祖父から聞いた古い話だという。

昔、書堂の先生が三兄弟を教えていた。ある日先生は三兄弟に将来の希望を順に言わせた。長兄が大きくなったら大臣になりたいと言うと、先生は満足した表情で、それはよいと賛成した。次兄が大きくなったら將軍になりたいと言った。先生はやはり満足した表情で、それはよい、男は大志を持たねばならんと言った。末っ子に聞くと、ちょっと考えてから、将来の希望はさておき、犬の糞が三つあったらよいのにと答えた。表情を曇らせた先生が、なぜかと尋ねると、末っ子が言うには、自分より本を読むのが嫌いな長兄が大臣になりたいなどと大口をたたくので、犬の糞を1つ食わせてやりたい、また自分より臆病な次兄が將軍になるといって大口をたたくので、犬の糞を1つ食わせてやりたい…そこまで言った末っ子が口ごもると、先生が顔を歪ませながら、声を張りあげた。では、最後の一つは、と。

ここまで話した祖父は、著者に、その末っ子が何と言ったと思うかと尋ねる。

「そりゃ、先生に食べろと言ったんでしょ」

「なぜだ」

「そりゃ一番上の兄さんと二番目の兄さんのでたらめな話を聞いて喜んだからでしょ」

「そうだ。お前の言うとおりで。お話はそこで終わりだ。どころで、お前がその末っ子だったとすれば、書堂の先生にそのように言えるかな」

幼い私はそのとき、言える、と大声で言った。するとハラボジは、こう言った。「世和や。お前がこれから、いま言ったとおりにできなくなったら、三つ目の犬の糞はお前が食わなければならないということを、忘れてはならんぞ」

私は成長していくうちに、三つ目の犬の糞を私が食わなければならないということを、しばしば認めなければならなかった。

5. 結語

洪世和は本書出版後もパリで故国の地を踏むことを夢みながら亡命生活を送っていたが、1997年には本書の日本語翻訳出版をきっかけに初めて東京を訪れ、韓国からやってきた縁者たちともそこで再会できたらしい。また、1999年6月には20年ぶりにめでたく一時帰国が叶えられ、その後何度もパリとソウルを往来できるようになったという。しかし、今もパリに居を構え、文明批評的な文章を引き続き発表しており、1999年にハンギョレ新聞社から、『セヌは左右を縫い、漢江は南北を分かつ』という象徴的なタイトルの新著を出版した。インターネットが盛んな韓国にふさわしく、彼のホームページも公開されている。そこにアクセスすると、「あなたは、…番目に犬の糞を食らった人です」と表示され、読者たちの掲示板を読むことができる。著者は未だに犬の糞を食らうことにこだわり、若い人たちにその体験を伝えようとしているのである。